川西まちづくり委員会　子育て教育文化部会　地域文化財フィールドワークレポート

信州上田 川西紀行
～東昌寺（とうしょうじ）・浦野宿（うらのじゅく）～

川西まちづくり委員会事務局
〒386-1106 上田市小泉863-1
川西地域自治センター内
電話080-5827-9724
E-mail
kawanishi.machizukuri@gmail.com

第４号
令和７年３月発行

いにしえの時代に思いをはせて

浦野氏の菩提寺 古刹東昌寺と江戸の面影残す浦野宿を歩く

川西まちづくり委員会 子育て教育文化部会は、地域の方のお話を聞く地域文化財学習会とフィールドワークを行いました

P1　部会長メッセージ
P2　東昌寺
P8　浦野宿
P11　フィールドワークを終えて
　　委員の想い

浦野宿まちあるきマップ
イラスト　ミヤザワ ツトム

川西まちづくり委員会ホームページ

はじめに

子育て教育文化部会
部会長　高沢　恵
（浦野南団地）

川西紀行第４号の発行にあたり、私たちの部会では我が川西地区にまだまだ残る歴史的文化財を訪ね、その歴史に精通された方のお話を聞くとともに自分たちの目で確かめ、地域の皆様にもご紹介したく、どんな内容のフィールドワークがよいか、話し合いを深めてきました。

そして決まったものが、浦里地区の東昌寺と、江戸時代に宿場町として栄えた浦野宿であります。

フィールドワーク当日、浦野宿の歴史に詳しい倉坂勝様、清水武徳様とともに、委員を含め総勢12名で秋晴れの浦野宿を歩きました。そして東昌寺では、住職の横沢敬雄様にご案内いただき本堂及び鐘楼と山門を見て学ぶことができました。

いずれの見学におきましても、今日も残る水路跡や市神様・高札場、東昌寺の貴重な建物・文化財を自分たちの眼で見ることにより、その歴史のにおいを感じ、当時をしのぶに至ったわけであります。

当日をともに歩きその場その場でご説明いただいた倉坂様、清水様、そして東昌寺にて快くお迎えいただき貴重なお話をいただいた住職様に深く感謝の意を表します。

東昌寺山門　　絵・高沢　恵

【古文書を読む会】
地域に残る古文書を読む活動をしています

解説文は浦野の地域歴史愛好家の皆様が執筆された「浦野誌」（平成30年浦野自治会発行）を元にして掲載させていただきました。

萬年山 東昌寺

鎌倉時代、浦野馬脊郷は「東馬脊郷・浦野氏」「西馬脊郷・薩摩氏」に二分支配されていた。想えば、浦野氏は木曽義仲配下であり、薩摩氏は源頼朝重臣工藤氏末であった。

東昌寺は、寺伝によると、建長2年（一二五〇）臨済宗京都東福寺開山圓爾辯圓大和尚によって開基された。しかし鎌倉時代の長い伝承は失われていった。

寛永16年（一六三九）「馬越村田畑明細御改帳」の畑地名会下下畑」合計四五筆二貫六八九文が記されている。「会下」は「えげ」と読み、学寮にいる僧をいう。この付近に鎌倉時代以来の寺があり、会下所もあったのであろう。入馬越の上部、浦野五六七番地辺に平坦で周囲に石垣をめぐらせた地があり、その辺が初期の寺跡かと思われる。

本堂・庫裏

天文10年（一五四一）

「東昌寺記」によれば「天文十年浦野美濃守友久、当寺を再建し荘田並に一口の梵鐘を寄進し、乱世盗難に逢って之を亡失す」と記されている。浦野寺山に開基されたのは、天文初年頃であった。

本堂裏墓地にある浦野氏宝篋印塔によると、永禄11年（一五六八）3月蘭庭妙芳、6月大松玄久が死去した。二人は夫妻と思われ、当寺を開基した人で「大松玄久」は美濃守友久である。

永禄12年（一五六九）東昌寺は臨済宗であった。この頃、越前一乗谷心月寺住職をつとめた才応総芸和尚により曹洞宗に改める。師は三重県や塩尻市などに多くの曹洞宗寺院を開いた。九条袈裟と袈裟袋が残され、袋銘文「法衣袋一片心月才應新添　水紋之地白　牖者赤字緞子包納之　東昌寺丈

萬年山 東昌寺

横沢敬雄住職

萬年山東昌寺は鎌倉時代の建長二年（一二五〇）、臨済宗京都東福寺開山圓爾辯圓和尚によって開基されたと伝えられています。

その後の永禄8年（一五六五）から永禄十二年頃に、浦野領主の浦野友久に招かれた福井県の一乗谷心月寺の才応総芸和尚により曹洞宗に改められ、寺院を再興したとされています。

江戸時代の火災で建物を焼失しましたが、その後の享保年間から天保十二年にかけて工事を重ね、現在の本堂・庫裏、山門、鐘楼が完成しました。

上田市指定文化財の鐘楼は諏訪立川流宮大工、宮坂常蔵が手掛けたもので、入母屋造り、桟瓦葺、袴腰付きで鏡天井に龍が描かれ、生き生きとした彫刻が施された見事な建物です。

また、寺宝として袈裟（けさ）や法被（はっぴ）・打敷（うちしき）など七領（かさね）が上田市の文化財に指定されています。

山門

山門天井絵

室之公用　干時永禄十二巳己卯月八日（花押）」とある。この時、曹洞宗に改宗した才応総芸和尚が、九条袈裟を新調し、東昌寺丈室の公用として残された。師は間もなく、5月17日示寂された。

「実叟道真・永禄十二年十二月十八日」この人は、10月6日相州三増坂で武田軍と北条軍が戦い、浦野民部右衛門尉重秀が戦死した。この人を12月に葬ったのであろう。

永禄13年（一五七〇）3月晦日、見こ田衆四名が法被を寄進した。この法被は「血染めの法被」ともいわれ、先に記した戦死者の遺品という。

天正10年（一五八二）2月、木曽義昌、織田方につき、織田・徳川軍は甲信に攻め込み戦乱となる。3月11日、武田勝頼一族自害して滅びる。この時、3月5日浦野氏はいずれかで戦闘し、家臣と共に戦死したのであろう。宝篋印塔「光桂宗玉・天正十年三月五日」とある。浦野頭主は、元亀3年（一五七二）文書の宛名浦野源一郎であろう。

東昌寺の寺宝～法衣（袈裟）・法被・打敷など七領～

〔撮影〕令和6年 川西公民館「上田市誌を語る」講座 東昌寺見学

才応総芸和尚法衣

みこ田衆寄進法被

才応総芸和尚法衣袋

座具

天窓寿清寄進法被

壁掛

※紙面の都合上掲載できなかった写真はホームページよりご覧いただけます。

天正11年（一五八三）3月5日、光桂宗玉一周忌法要に、後室天窓寿清は自繍の打敷を寺に納めて頓證菩提を祈った。二人は夫妻であった。

「実山虎真・文禄五年黄稔晦日」。法名から推察すると「実叟道真」の子新八郎友清と考えられる。このように見ると上州大戸城にかかわる人物も葬られた。

「天窓寿清・慶長二年二月二十一日」浦野氏晩年を一族の頓證菩提を祈ってきた人物が世を去った。浦野氏はこの頃、それぞれに生地を求めて大名の家臣になり、はては百姓となって名主などをつとめたのであろう。

江戸時代、浦野宿開設される。元禄年間墓参りの火から東昌寺は全焼したという。住職や檀徒は再興のために苦心した。

浦野氏墓所

享保9年（一七二四）この頃、大庄屋制あり林三郎左衛門勤める。この年、本堂建設のため起工し、堂の位置を西段上に定め、東西二七間南北十間の本堂・庫裏一体の建物が竣工した。藩は褒賞として米九十俵を村に与え、庄屋は請書を提出した。その後、三門・選仏場（座禅堂）・鐘楼などが人々の力により建設され、曹洞宗寺院としての姿をととのえた。

享保20年（一七三五）2月、浦野宿大火あり新町・本町を全焼する。この頃、松本藩は通行に難渋するため、通路を変更し参勤通行・年貢米輸送がなくなり、宿は重なる困難にあった。

仁王門

寛政12年（一八〇〇）この頃、浦野宿問屋は財政困難となり交替した。東昌寺は黒門下に石積整地して楼門造りの山門を竣工した。階上に釈迦を中心に十六羅漢像を奉じ、天上は龍を中心に鳥獣を武重休民が描いている。大工は上田藩工も勤めた末野氏という。

天保8年（一八三七）鐘楼の建設計画が進み、この年、市神社を再建した大工諏訪立川流立川昌敬が請負う。入母屋造り桟瓦葺き腰袴の彫刻をした見事な鐘楼である。天保11年6月16日の上棟式にあげた昌敬の祝詞が諏訪市博物館に残されている。

天保12年（一八四一）天井に龍が描かれ、この年に竣工した。

本堂から鐘楼建築まで、享保から天保12年、一一六年間に東昌寺は工事を重ね立派に整備された。

明治維新（一八六八）を迎え、大改革により、これまで負担に耐えてきた人々もこの地を去る者もあった。東昌寺は借財の償還に苦しんだ。大正初年、二十世祥国賢瑞大和尚の時、檀徒と話し合い償還を進め終了した。大正7年1月「當山保存金積立各位　福寿長久　災障消除」の塔碑を記念に建立した。

昭和18年（一九四三）第2次大戦に梵鐘を供出し、コンクリート製の重しがさげられていた。

昭和27年（一九五二）戦後の復興なり、講和条約なったことを記念し、住職実参文雄和尚は梵鐘の再建を発願し、鋳金界の名匠、歌人としても知られた香取秀真氏に製作を依頼した。昭和28年5月、朝鮮様式による正面撞座の左右に天女を配した十二律勝絶音の名鐘が鋳造された。助工長野垤志氏を配した、茶の湯釜作家の無形文化財保持者であった。9月27日、撞初式が行われた。香取氏は檀徒による駕籠にて寺に登る。一二〇〇人余の檀信徒により供養と撞初がされた。氏は歌を詠まれ、後日寺に送られてきた。昭和28年（一九五三）11月、香取秀真氏は文化勲章を受章した。

昭和29年（一九五四）1月12日、宮中歌会始に召人をつとめた香取氏は、この疲れからか発熱し、1月31日死去した。東昌寺鐘は絶鋳となる。この年、境内に歌碑が建立された。

平成8年（一九九六）東昌寺は、檀徒会館（選佛場）を建設し本堂の屋根を銅板葺きに改修した。今は第24代敬雄和尚となった。

梵鐘のお話

鐘楼

梵鐘

鐘楼の脇に円柱型の巨大なコンクリートの重しが置かれています。

太平洋戦争で梵鐘が供出されたときに鐘楼の建物を保持するため現在の梵鐘が完成するまで吊り下げられていたものです。

戦後、新たな梵鐘は昭和二十八年に鋳金の名工・アララギ派歌人である香取秀真氏によって鋳造されました。十二律勝絶音（十二律は中国・日本の音階のひとつ、勝絶音は西洋音階のヘ音に当たる）、朝鮮様式で天女の彫刻を配した、たいへん美しい梵鐘です。

鐘楼脇に香取氏が撞初式の折に詠んだ歌の碑が建っています。撞初式の印象と遠く響き渡る鐘の音に地域の発展と平和を願う気持ちが詠まれています。

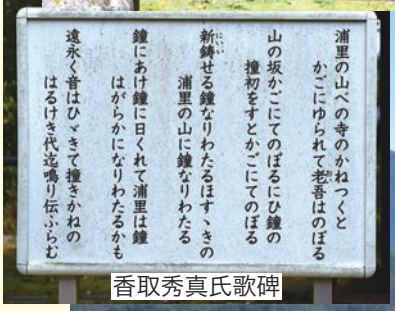
この年の11月香取氏は文化勲章を受章。翌年の宮中歌会始に召人を勤めた後、急性肺炎のため亡くなり、東昌寺の梵鐘は香取氏の絶鋳となりました。

鐘楼と梵鐘は令和6年までの修復を終えて、12月1日から鋳造の頃の姿に戻った梵鐘が再び美しい音を響かせています。

鐘の音は、午前11時半に野良仕事をしている人に昼飯の準備をする時間を知らせ、寺から望む山に日が沈むとき一日の終わりを知らせます。

鐘楼に施された彫刻

コンクリートの重し



香取秀真氏歌碑

鐘楼から見える里山の風景

浦野宿

一、保福寺道

江戸時代に上田から松本へ通じる道は小県方面では保福寺道・松本街道、浦野道などと呼び、松本方面では保福寺道、江戸道、江戸街道などと呼び、双方共に北國脇往還と書いている。

上田市新町の矢出沢川に架かる高橋の道端にある「北向観音道」の道標の所から、北國街道と別れて千曲川を渡り、中之条、上田原を通り、浦野宿、青木、奈良本、保福寺峠を越え、岡田宿の北はずれで善光寺街道と合流する。

二、浦野宿の成立

武田氏が信濃に侵略した時代は、その領国支配の一環として、伝馬役が課せられていたことが小県郡下の長窪、和田宿の問屋に残る文書よりわかる。

古代以来重要な道筋にあった浦野も同様であったと考える。

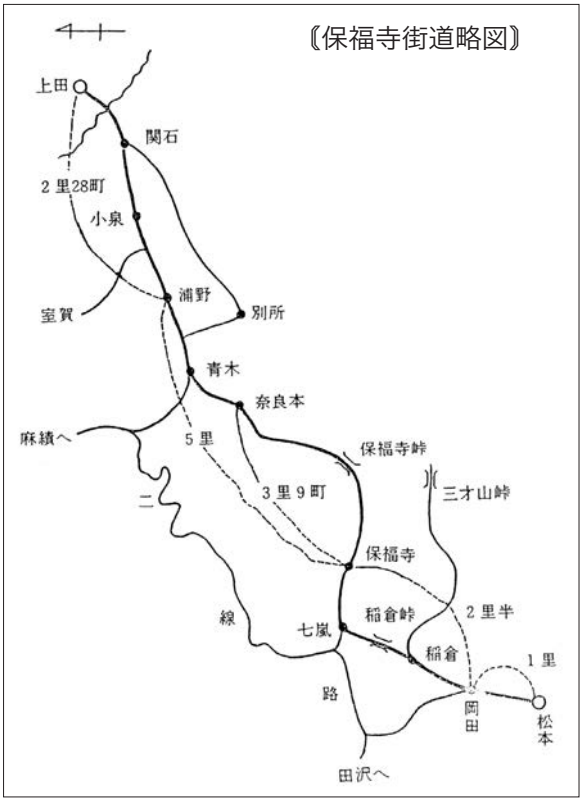
天正10年（一五八二） 武田氏滅亡後、尼が淵に城を築いた真田昌幸は小県一円支配に成功した。文禄4年（一五九五）時の天下人豊臣秀吉が上州草津に入湯を計画した。近江を出発して木曾路を通り、保福寺峠を越えて浦野で一泊し、真田を経て上州に向かうというもので、この計画は実現しなかったが、このことからも近世初期に浦野に宿駅の機能があったといえる。

これを裏づけるように、長国寺殿御事蹟に慶長4年（一五九九）正月、浦野宿問屋は海野町、長窪と共に「戌之納」として金壱両を役料として納めている。

戌年は前年の慶長3年である。

慶長5年（一六〇〇） 関ヶ原合戦に勝利して天下を握った徳川氏は、街道支配のため慶長6年以降、宿駅制度を確立するために問屋役を命じ宿駅を整備した。この頃、近世浦野宿も成立したものとみえ、明治14年（一八八一）馬越村誌によると慶長年間馬越村浦野宿が発足したことが記されている。

《保福寺街道略図》



宿場の面影を残す本町（昭和19年頃）

浦野宿（うらのじゅく）案内看板文

江戸時代初期・慶長年間（1596～1615）、古代からの東山道の道筋に保福寺道が開かれ、馬越（まごせ）村「浦野宿」ができました。

本町・横町・新町・上町（かみちょう）に約100軒あり、本町が伝馬役をつとめ本陣・問屋役がいました。松本藩主の参勤交代の宿泊や城米輸送が盛んに行われましたが、江戸時代中期に通行路の変更がなされ通行が少なくなり、宿の運営に影を落としました。

享保20年（1735）2月、横町より出火し強風にあおられ80軒を焼く大火災となり、藩の支援も受けましたが、復興に苦心しました。

しかし、江戸や地域への米穀類・紙・煙草・絹・紬（つむぎ）・＊太物（ふともの）・＊奥綿（おくわた）・薪・小間物・酒・柿や、糸魚川からの肴（さかな）や干塩魚・塩など海産物、＊富山反魂丹（はんこんたん）・輪島漆器などが流通しました。

4と9の付く日には六斉市が開かれ、千曲川左岸の村々や峠を越えて東筑摩の人々までが産物を人や馬の背に乗せて来て、市の日は賑わったと伝えられます。

＊太物……綿織物・麻織物など、太い糸の織物の総称
＊奥綿……埴科・松代など上田以北で栽培した綿
＊富山反魂丹……富山の薬商人が販売した丸薬の一種

浦野宿には現在も問屋屋敷跡や高札場、市神様、街道に面したうだつのある町家、道の脇の水路跡などが見られ、多くの人や物で賑わった往時をしのぶことができます。

三、伝馬

伝馬役は、馬二五匹と人足二五人を常置して勤める。元和8年（一六二二）仙石氏の上田藩領治初年の免相に、問屋屋敷五五〇文と伝馬屋敷二貫四〇〇文が年貢を免除されている（除地）。

これは問屋役一人と伝馬役一人一〇〇文ずつ二四人計二五人により勤めていたことを物語っている。

伝馬役は、公用（幕府役人・公家）のために設けられた制度で、宿と宿の間を継ぎ送りによって、人や物を目的地に送ったが、社会の発展により民間の産物の流通が盛んになり、駄賃を取って業務を行うようになった。

四、中馬

江戸時代の中頃になって産物の流通が盛んになると、牛馬を使って民間の輸送業が発達した。これを中馬という。信濃の中南信地方では特に発達し、保福寺街道でも通行が増え、宿問屋の業務を脅かすようになる。浦野宿問屋と保福寺問屋が中馬の取締りを連帯して訴えた文書が残っている。浦野宿でも「藤屋」という中馬問屋があって、近隣の中馬仲間の中心となり街道を通る中馬荷にかかわっていた。

五、近世の市

大石慎三郎著「江戸時代」に真田氏の上田築城当時、小県郡下に海野・前山・保野・馬越・原に市が開かれ、それぞれ一日ずつ日をずらせて六斎市を開き、郡下では毎日市が開かれていた。上田築城後海野郷・原郷の人達により上田の町づくりをした時、市も上田の海野町や原町に移し保野・前山を廃止した。

馬越については、保福寺峠付近の村々が上田の両市まで千曲川を越えて、一日に往復するのは困難なので上田の市の補助的に残したと記している。

現在の市神社➔

市神社跡⬇

六、浦野宿の市と市神

市は四と九の六斎市でにぎわった。宝永3年（一七〇六）差出帳によると、浦野組の村々はもとより、小泉組・塩田組の村々もこぞって浦野の市に来て売買したことが記されている。本町中程を横断する杉の沢を境に上と下交代で市を開いた。市神社は本町西の桝形近くの旧生島小左衛門宅跡の入口にあったが、昭和36年商売繁盛を祈って出浦町へ遷座した。現在は再び本町の高札場横に遷座している。台石の天保8年再建と彫られている。この祠には天保年間に東昌寺の鐘楼を建築した時、生島家に泊まって東昌寺に仕事に通った諏訪の立川流の大工が同家で作ったという伝承がある。姿が美しく木鼻などの彫刻が見事である。

七、浦野宿の街並み

浦野宿は、東西に走る街道沿いに、東から宿や村々の警備の役を勤める人達の町。次に宿役を勤める問屋・本陣、伝馬役を勤める人達・飛脚屋・馬宿等宿の中枢部の本町。桝形の南北に走る部分が横町、坂を登って大神宮の錦沢まで新町で、繭や絹糸商品、幕末からは蚕種業者、中馬屋もあった。これから西が上町で紺屋・鍛冶屋等職人が多く雑貨屋や旅籠などもあった。

現在の浦野宿の街並み

万葉歌碑〈1976年（昭和51）建立〉

浦野の集落から東昌寺に向かって登った所に薬師堂があり、その横に万葉歌碑が建っています。

彼の児ろと
寝ずやなりなむはた薄
宇良野の山に月片寄るも

今夜はあの子と一緒に寝ることができないままになってしまうのでしょうか。宇良野の山に月が傾いています。

古代、浦野川の上流から中流にかけての沿岸、山々に囲まれた地域が「うらの」と呼ばれていました。若者が傾く月を見ながら恋しい人を想って見ていた山は、十観山や大明神岳、夫神岳、子檀嶺岳などの私たちにも親しみが深い山々なのでしょう。

八、高札場

高札場は問屋本陣の前にある。享保20年（一七三五）の大火にあった際には、制札6枚がかけられていて取りはずしたとある。台石の様子から古い時代から現在の規模と考えられる。

高札場

宝永3年（一七〇六） 仙石氏と松平氏の藩主交代時の引継ぎ文書である宝永差出帳によると、馬越村浦野宿には家数九五軒四五五人と、商札を持った商人一六人、馬喰三人、鍛冶屋一人、酒屋一軒、（4年前より休業中）、馬三二匹などの記載がある。

浦野組・小泉組・塩田組の村々では、上田の原町・海野町と浦野（馬越）の市に行って売買すると書かれている。享保20年（一七三五）2月24日夜の大火の口上書きにも市日であったことが記されている。

享保12年（一七二七）には、本町中程の橋を境にして上下それぞれ三斉ずつの市を開き、当番でない日は一切売買をしないことを申し合わせている。穀物等は馬一駄の単位の取引もあり、袋やかますに入れて運んできたようである。材木なども取引されたという。

浦野宿で市と共に注目される商いに紙の取引があった。宝永差出帳によると、当時浦野組の当郷以西の九ヶ村（現青木村）には二五六人の紙漉がいて、ここで漉いた紙は上田紙と称して江戸の紙問屋に売られていた。その後、藩の振興策もあり、紙漉人は増えて生産量も増えたものと思われる。

九、浦野宿の発展

慶長年間近世の宿場として発足したが、元和8年（一六二二）初代上田藩主真田氏から仙石氏に交替した年、問屋以下二五人により伝馬役をはたしていた。

文化年間（一八〇〇年初期） 浦野に上田紙の産地問屋が九人いて、主産地の青木村で漉かれた紙を集荷し、江戸へ送って繁盛していたものと思われる。

産物の輸送については、宿問屋が支配する伝馬があったが、江戸時代初期の産業振興策により各地に産物ができ、これを輸送するために民間の輸送業者中馬が発達した。これは伝馬のように宿と宿を継ぎ送るのではなく、目的地まで同じ牛馬で付け送るもので、安い駄賃で早く運んだため繁盛し、伝馬と競合するようになり両者の争いが生じた。

うだつのある家

明和元年（一七六四） 両者の訴えを幕府が裁定した際、中馬業者に保福寺街道では松本から上田への荷として米穀類・酒・薪・紙・たばこ、上田から松本へは塩・茶・楮が許されている。これによって当時この地域で流通して売買されていた物がわかる。

このように地域の中心地として、また物の流通基地として浦野宿は繁栄してきたが、幕末から養蚕が盛んになり養蚕農家、蚕種製造等により、繭や絹、絹織物等を扱う商人も出てきて、宿場の姿もだんだん変わってゆくようになる。

道路脇に残る水路跡

十、浦野宿と大火と水害

享保20年（一七三五） 2月24

日夜、横町吉助方より出火。本町、新町に延焼、八〇戸を焼いた。近村はもとより、塩田組からも消火に駆け付けたが、手のつけようもなく、浦野宿の大半を焼く大火になった。上田藩より復旧のために米一〇〇俵、大麦一〇〇俵、材木五〇〇〇本、金三五両、年貢残米七三石、人足一五〇〇人を与えられた。

また、薬師堂縁起を書いた板に、天保7年（一八三六）4月8日、村大火災により薬師堂焼失、再建と書かれている。

大神宮の記録に、元禄7年（一六九四）7月1日の大水で伊勢宮埋もれるとある。山からの土石流によって大神宮が土中に埋まり流されたのである。この時は、お宮の被害だけでなく、新町方面を中心に大災害を受けたものと思われる。大神宮にあった伊勢講のための御旅舎も流されてしまい、講ができなくなったので、御師の希望により上田横町の伊勢宮に移ったと記録に残っている。

免相には田畑の水損等が記されているが、宿内の住宅地の水害等についての記録は少なく詳細は不明である。

フィールドワークを終えて
～子育て教育文化部会委員の想い～

岩下　真由子（仁古田）

私は他県から来た者なので、このあたりの歴史は全然わからないままで今回のフィールドワークに参加しました。

「浦野宿」という言葉は何回か聞いたことがあったけど、実際に行ったのは初めてで、全国各地にある宿場が何のために、どのようにあったのかもよく知りませんでした。

家の下に穴があいているのは、馬に水を飲ませるために水をひくためであることや、宿場の通りは中がすぐに見通せないように（敵が侵入しにくいように？）升形になっていることなど、なるほどと思うことをたくさんお話しして頂いて勉強になりました。

東昌寺は歴史あるお寺でした。和尚さんのお話しが上手で、過去に全焼したことや、鐘楼を富山の職人さんたちに修理しに来てもらったことなど教えて頂きました。

少し知識を得たので、前よりも色々なことに興味がわきました。

久保田　賢二（ひばりが丘）

～浦野宿・東昌寺フィールドワークに参加して～

10月12日天気は快晴、私たちは浦野公民館に集合し、倉坂さんと清水さんの案内の下、浦野宿へ向かって歩いた。浦野宿は街道沿いに東西方向に延び、街道は浦野宿のほぼ中央で升形になっている。その升形の場所は横町という。その横町を通り抜け右に曲がると、街道は東に向かって下り坂となる。そこを下るとすぐに市神社跡があった。浦野宿では四と九の付く日に市が開かれたとのこと。市神社はかつて国道に移転された。ここは、その市神社があったことを示す跡地である。のちに市神社はこの浦野宿に戻ってきて、今は高札所の隣に設置されている。街道を挟んで市神社跡の向かい側にはかつて梅屋という旅籠があった。上田から松本へ向かう旅人はこの旅籠に泊まり、次の日の朝早く峠越えをしたのではないか、または、峠を越えてこの浦野宿にたどり着いた旅人はこの旅籠で一息ついたのではないかと私は想像する。さらに街道を東に向かって下ると、問屋やしきの一角に高札場があった。江戸時代の頃から領主がこの場に札を掲げ、定めを知らしめたようだ。そのころにはこの地域に文字の読める住人がいたのだ。驚きである。どのようにして文字を学んだのだろうか。さらに下って街道の東升形に着いた。ここが浦野宿の東の端となる。ここで反転して街道を西に向かって登った。さらに進み大神宮の裏を通って右に曲がると、薬師堂がある。ここには浦野のことをうたった万葉集の歌の石碑がある。この歌があることで、7～8世紀の万葉集の時代にはすでに浦野に人々が住み、生活をしていたことがわかる。16世紀の戦国時代に作られた上田市街地よりもこの地は8世紀も早く発展していたのだ。

次に私たちは、一旦浦野公民館に戻って、自動車で東昌寺まで向かった。東昌寺は今から八百年ほど前に臨済宗の寺として創建され、永禄十二年に曹洞宗になったとのこと。まず山門をくぐると、天井には絵が描かれている。龍、クジャク、獅子、鳳凰、麒麟と思われる絵が私たちを迎えてくれた。急な階段を上ると正面が本堂である。右には鐘楼がある。本堂で和尚様から東昌寺の由緒などをお聞きした。また、曹洞宗には本山が二ヶ所あり、永平寺と総持寺とのこと。ご住職の軽快なお話に聞きほれ、あっという間に時間が過ぎた。その後、鐘楼に上った。とても見晴らしがよく、塩田方面が一望できた。鐘は11時半と太陽が山に沈むころの2回突かれるとのこと。今年の大晦日には児童・生徒と除夜の鐘を昼の正午に突きたいとのことであった。

今回の浦野フィールドワークを実施したことで、この地域の歴史や文化に触れることができて素晴らしい体験をした。浦野を案内していただいた倉坂さんと清水さん、東昌寺を紹介していただいた和尚様に感謝申し上げます。

高沢　恵（浦野南団地）

①浦野宿の探索にて

江戸の頃まで栄えていた宿場や市のたった跡が、現在でも連綿と残っており、当時を忍ぶことができる水路跡、石垣や本陣のあったとされる渡邊家など、歴史というものがこうやって残っていくのだなあと、フィー

ルドワークをしてみて改めて感じることができました。大変楽しい散策ができ、倉坂さま、清水さまに感謝です。

② 東昌寺にて

まず、本堂の大きさに驚きました。およそこれだけの大きなお寺さんが、山のふもとでなく、やけに中腹まで登った所にあったことも、大変不思議な気がします。

銅板ぶきの屋根の改修工事で、ヘリコプターでもトラックでも同額の費用がかかる見積もりだったこともうなずけます。

鐘楼から見た眺めのよさ、梵鐘の戦争での供出と当時梵鐘の代わりになるコンクリートの塊、そして再建に至るお話も興味深く聴くことができました。

住職様の快いご対応やお茶菓子までご用意いただきお教え下さったことに感謝感謝です。

フィールドワークでお世話になりました ありがとうございました

清水 武徳さん

倉坂 勝さん

成沢　珠美（藤の木）

フィールドワーク当日は、天候にもめぐまれ少し暑いくらいでしたが、秋の気配も感じられ気持ちよくフィールドワークに参加させていただきました。

はじめに浦野宿を散策しました。浦野宿では古い建物が立ち並び当時の雰囲気?が残っていました。家の入口の石垣の穴には山の沢の水が流れてきて、馬の水飲みや生活用水として使っていたそうです。

次に東昌寺です。高台にある寺からの景色はすがすがしく絶景でした。

午前11時30分に鳴る鐘について、12時までに家に帰ってお昼が食べられるように30分前に鳴らしていたのだと住職に教えていただきました。消防のサイレンも11時30分になっているのは知っていたのですが、そのような理由があったとは知らなかったし、なるほどと思いました。今後はこの合図で家に帰ろうと思います。

鐘楼の天井や袴腰には素晴らしい彫刻や絵があったそうですが、高所恐怖症のわたしにはとてもとても高すぎで腰がすくみ、なにも確認できませんでした。また行く機会があったらそういった部分も落ち着いてよく見たいです。

フィールドワークを通じて、普段はなかなか自分で勉強して歩いてみるなんてことはできなそうなので、こうしていろいろと教えていただけて大変貴重な経験となりました。

上田に住み始めて17年、浦野に住み始めて14年くらいですが、この小さな地区内のことも知っていることが少ないと実感しました。今後は地域の文化や歴史に対してすこし興味をもって生活していこうと感じました。

現在の市神社と高札場、浦野宿の問屋だった渡邊家
絵・高沢　恵

西沢　由美子（上室賀）

浦野宿では宿場町の名残を教えていただきました。

昭和四十年くらいまでは白壁の家が多くあったこと、現在もまだ残る建物があることに驚きました。宿場では必要な水路の名残が民家が建て直されてもまだあることは貴重なことだと思いました。

宿場町であったため、人も物も多くあり定期的に市が立っていたこと、現代の商店に合わせて市神様が移転したものの、商店が閉店したため高札場の横に戻ってきて現在は並んでいることが、ここならではと思いました。

東昌寺では寺の成り立ちを細かく教えていただきました。鐘楼に登らせていただいたのは怖くもあり貴重な体験でした。

平林　陽子（越戸）

10月12日に浦野宿・東昌寺のフィールドワークをしました。浦野宿のあった場所は、今まで通ったこともありましたが、宿場町ときいても想像もつきませんでした。今回、倉坂さんと清水さんにお話や説明を聞き、松本のお殿様や一般の方が泊まったり、又、農業をしながら商売をしていた方も多く暮らし賑わっていたようで、当時の生活が目に浮かぶようでした。

薬師堂には仁王像が安置されていました。板彫りとは思えない立体感でした。

東昌寺では、鐘楼にあがらせていただきました。鐘楼には獏などの彫刻が掘られていました。塗り直された鐘はとてもきれいでした。

今まで午前11時30分と夕方に鳴る鐘はどこからきこえてくるのかと思っていましたが、東昌寺の鐘の音だと初めて知りました。

今回フィールドワークをして身近で何気ない場所や道でも歴史をたどると意味があり造られていたことがわかりました。

子育て教育文化部会